

博士論文の内容の要旨

日文中訳における連体修飾構造の取り扱いに関する研究
—台湾人訳者の問題点を中心として—

国際学研究科博士後期課程
蔡 佳樹

本論文は、日本語出版物の標準中国語(Mandarin Chinese)への翻訳(以下、「日文中訳」と略す)実務において、原文の内容が的確に伝わらない中国語化の最大の要因となっている日本語原文中の連体修飾構造に着目し、その翻訳上の難点を解明したうえで、適切な中国語への移し変えのための翻訳手法を提示しようとするものである。特にこうした業務による日本の出版物の紹介が日常的にさかんに行われる台湾を、特有の表現習慣を持つ中国語社会とみて、そこに生じる問題点の具体的な解決法を明らかにすることを目指した。(ただし、研究成果の標準中国語一般への適用可能性も研究の過程において検討を行い、成果の記述に反映させた。)台湾の翻訳会社から業務依頼を受けている日本語学習者、および、実務に関わる可能性の高い日本語主専攻の学部4年生と大学院生をインフォーマントとして日文中訳例を集め、主たるデータとし、翻訳実務経験者の視点から実際の問題の指摘を行うとともに、翻訳学および言語学の方法を適用した分析結果にもとづき、有効な翻訳手法を論じた。

以下、章ごとに内容を略述する。

序論では、研究動機・目的・方法の説明を行った。

第1章では、翻訳者の立場から見て論点となることとは何か明確にするため、日本語と中国語のいわゆる「連体修飾」の構文上の特性に関して比較対照を行った。まず、日本語の連体修飾構造の統語的特徴を確認するとともに、言語学で論点とされてきた1)「内の関係」と「外の関係」の対立、2)「限定的修飾」と「非限定的修飾」の対立を翻訳上の問題として検討した。続いて、中国語の連体修飾構造を考察し、1)「的」という標識の存在と特徴、2)[被修飾部]+[補足説明]という構造があることを指摘した。さらに、両者の共通点として、1)「連体修飾」という概念があること、2)[連体修飾節]+[被修飾部]という順序を持ち構成されること、3)全体が名詞句としてひとまとまりになること、の3点を挙げた。

第2章では、先行研究である翻訳技法の参考書と日文中訳の研究書に論じられた連体修飾構造への対処法を検討した。1) 一個の文(sentence)として長いもの(以下、「長文」

と呼ぶ)の多さが日本語の特徴であるが中国語にはなじまないこと、2)長文になることの原因のひとつが連体修飾構造であり翻訳上の難点であること、3)手法として完全なものがないことの指摘、という3つの成果を確認し、1)構文に関する類型的考察がないこと、2)不適訳が生じる原因の解明がないこと、3)事例にもとづく手法の有用性の検証がないこと、4)日本語教育・翻訳教育での実践法の議論が少ないことの4点を、先行研究が残した問題であり、本研究によって成し遂げるべき課題とした。

第3章では、実際の翻訳上の問題点を類別し、1)長い連体修飾節の理解の問題、2)並列構造の分析・把握の問題、3)重層構造の分析・把握の問題、4)連体修飾節の文法機能の理解の問題の4つに分けてそれぞれに検討を加えた。次に、実際の訳例を集めるために行った翻訳試行調査の概要を記した。この調査は、上記の類型ごとに5問、合計20問の日文中訳の問題を用意し44名のインフォーマントを対象に1人あたり10問の翻訳をさせるというものであった。それに続いて、上述の問題各問について、集めた訳例の詳細な分析を行い、翻訳上の問題の原因を特定した。

第4章では、第3章の各類型それぞれについて問題の一般化を試み、問題が生じる仕組みを論じた。第一に、長い連体修飾節の理解について、1)原文の構造に沿って直訳してしまう、2)文中に挟まれる長い形式に原文の理解を妨げられる、3)主語を特定できないため全体の意味関係を誤解する、4)原文の区切るべき箇所を把握できない、5)原文理解に必要な助詞の機能を把握できない、6)常識や固定観念が正確な原文理解を阻害する、の6つを論じた。第二に、並列構造の分析・把握について、1)中国語の文型構成と表現習慣に合致した型式に訳出していない、2)並列関係を示す成分を見落とす、3)複雑な連体修飾構造が障害になり並列関係に対応した翻訳ができなくなる、4)並列構造と外部成分の関係を見落とす、5)並列関係を言い表すための翻訳手法を活用できない、の5つを論じた。第三に、重層構造の分析・把握について、1)連体修飾構造が長く複雑になると文の構成要素間の関係を正確にとらえることが困難になる、2)受身表現や文語表現などが理解を妨げる、3)意味的まとまりに区切る手法を活用できない、4)動作主と動作を表わす名詞句と動詞との間に介在する言語形式が長く含まれる情報が多いと重層関係を見落としてしまう、5)重層構造を言い表すための翻訳手法を活用できない、の5つを論じた。最後に、連体修飾節の文法機能の理解について、1)動作主や被動者を特定する文中成分を把握できない、2)助詞の機能を見落とす、3)被修飾部が形式名詞である場合、連体修飾構造をとらえることが困難になる、4)文法知識が欠如しているため連体修飾の基本構造を把握できない、の4つを論じた。

第5章では、第4章に論じた問題発生の特徴に就いた各問題の解決法を論じ、有効な防止手段や問題回避のための翻訳手法を有効性の根拠とともに提案した。第一に、長い連体修飾節の理解のために、1)局所的な短い連体修飾構造を直訳したり、主語・述語が明示された文に訳したりすること、2)中国語の語順や文型構成に合わせて日本語文の内容を再構成すること、3)意味のまとまりに区切る手法を活用すること、4)中国語の

表現習慣に合わせて四字熟語や複合語を有効活用すること、5) 文章記号を活用すること、という 5 つの手法を提案した。第二に、並列構造の分析・把握のために、1) 並列構造を示す標識を特定し、並列関係にある成分の範囲を正確にとらえること、2) 並列構造を示す機能語を対応する中国語の表現で訳出すること、3) 訳文に中国語の文型構成と表現習慣を適用すること、4) 並列関係の表現に加訳や倒訳など先行研究にも論じられた翻訳法を適用すること、という 4 つの手法を提案した。第三に、重層構造の分析・把握のために、1) 意味のまとまりに区切ること、2) 連体修飾構造外の文成分との間の統語関係を注意深く分析し、正確に見極めること、3) 加訳を適用すること、という 3 つの手法を提案した。第四に、連体修飾節の文法機能の理解のために、1) 連体修飾構造と他の構成素との統語関係を見極めること、2) 被修飾部に関わる成分の文法的特性を正しくとらえること、3) 助詞機能を正確に理解すること、4) 文中成分を判断材料にして動作主と受動者を特定すること、5) 受身表現における名詞句の意味役割を正しく特定すること、という 5 つの手法を提案した。

第 6 章では、ここまでの成果にもとづき、連体修飾構造の適切な翻訳実現に向けた教育改善の提言をした。翻訳教育のために、1) 意味のまとまりに区切る手法習得のための実践法、2) 動作主と被動者を特定でき訳文に提示できるようになるための学習事項、3) 日中両言語の文型構成を正しく把握する練習法、4) 連体修飾構造外の成分の重視、5) 加訳や減訳、倒訳、変訳、直訳など従来の手法を使用する練習、という 5 つの項目を提案した。一方、日本語教育のために、1) 連体修飾構造の分析力向上のための練習、2) 連体修飾構造の正しい理解の成否に関わる他の成分の分析力の向上法、3) 文法機能の理解力を高めるための実践法、という 3 つの指導法を提案した。

第 7 章では、本研究の成果のまとめを行うとともに、今後の研究の可能性を論じた。

本研究の成果と意義（上述の 7 章にあるもの）を列举すると次のとおりである。

1. 従来から翻訳において問題を生じる構造として知られていた連体修飾構造を形式上の特徴から 3 つに類型化したこと。
2. 3 つのタイプのそれぞれについて問題点を明らかにし、翻訳上の問題を生じる仕組みを論じたこと。また、類型化が最適な手法の特定に有効だということを論じたこと。
3. 類型ごとに有効な翻訳手法を実例と根拠とともに提示したこと。
4. 連体修飾外の成分に着目し、それと連体修飾との関連性を確認したこと。
5. 教育への提言をしたこと。

以上に加えて、1) 長い連体修飾構造を取り扱うとき、その中に含まれる短い連体修飾構造の被修飾部が文全体の根幹に当たる層の主語ではない場合、直訳しても良いこと、2) 並列構造を示す機能語を特定してから対応する中国語の機能語へと直接に訳出する手法が有効であること、3) 重層構造の不適訳を生じる原因は層の異なりではなく、複数

の連体修飾構造間の関係性や、重層構造全体の関係性の複雑さによるということ、4) 連体修飾構造外の関連する文成分も、連体修飾構造の意味関係を構成する一部だと見なし、翻訳において同時に処理すべきだということ、これら4つの事項を研究の過程で発見し、指摘をしたこともまた、本研究の成果である。

以上